

## 座 談 会

## 西 鶴 の 発 見

出席者 熊 谷 孝 (国立音大名誉教授)  
 荒 川 有 史 (国立音大・明星高)  
 夏 目 武 子 (横浜市立大綱中)  
 司 会 佐 藤 嗣 男 (明治大)

△はじめに▽ 婦人民主クラブ再建連絡会主催の文学講座が、東京・目黒の大橋区民会館を会場として、いま盛況裡に回を重ねている。熊谷孝氏が、この講座の西鶴のセクションを担当しておられることは前号でも紹介したが、その第一回が△封建制下の民衆の生活と文学▽というテーマで、80年11月21日に開催され、文教研からも十数名の会員や何名かの誌友が参加した。

数日後に、この日の講演の論点を講演者自身に就いて確かめあう会を持つことになった。次期例会プログラム△常の町人二代目の文学としての西鶴文学▽へのレディネスとしてである。ここに掲げる記録は、紙幅の関係もあつて、必ずしも当日の会談の全容を伝えるものにはなっていない。が、右の目的に直接関係するような話題は、つとめて収録から洩れないようにした。

(編集部)

佐藤(司会) このあいだ婦民の講座からの帰り途に、熊谷さんがぼやいておられましたね。「きょう、時間切れでカットしてしまつたような点にも多少触れるような

形でレジュメが用意できれば、冬の合宿の西鶴の学習も能率があがると思うし、婦民のほうにも次回、それを△前回の要約と補足▽ということで配れるなら、参加者の理解の度合いも深まるだろうとは思ふんだがただそう思うだけで、今それを書いている時間はないな。」とおっしゃっていましたね。直接、僕に向かつて話しておられたんじゃありませんけど、それが聞こえてしまつたのですよ。

そういうことだつたら、と思つたわけです。僕たちとしても、もう少し突っ込んで確かめておきたいと思うことはあるし、ひとつこの機会に熊谷さんを囲んでいろいろお話を伺つてみることにしてはどうか？

そういう確かめあいの会談の記録が機関誌に載せられれば、どうせ今度もまた熊谷さんからは原稿が貰えそうにないから、ある程度その代用になる(笑い)。合宿には前もって抜刷りを用意すればいいし、婦民のほうも希望者にそれを配るようにすればいい。どのみち記録は会談の部分的要約ということに終わるだろうけれど、案外、こうした点をはつきりさせたいという聴き手

の側の要求を代弁しているような点もあつて、熊谷さんが独り合点で書くレジュメよりは好結果を生むような可能性もないわけじゃない（笑い）、と考えまして……もつとも、きょうという日を迎えてみますと、可能性は所詮可能性であつて現実性がないような気がして来てるんですけど（笑い）ともかく、そう考えまして、きょうの会談の開催を皆さんにおはかりしたわけです。どうか、十分突っ込んだお話し合いを願います。どなたからでも……。

#### 時期区分ということ

荒川 あの日お話を伺つていて僕としてはいろいろ考えさせられるところがあつたわけですが、なかでも一ばん得（とく）をしたなと思つたのは、西鶴と浮世草子の時期区分の問題でした。学生時代から始まつて二十年、二十五年と西鶴と取り組み続けておりますが、恐（こわ）いもの知らずの学生時代は別として、今ではいろいろ迷うことが多くなつて来ています。何しろ、西鶴に対する評価ぐらゐ、各人各様の各説が交錯し対立しているという分野も珍らしい

し、戦前、戦中、戦後の各時期というふう  
にネコの目みたいだに評価が変化するの  
この分野の特徴ですね。各人各様の見解が、  
ところで部分的にはもつともな主張点を示  
しているわけなのでして、そのところで  
こちらの判断にも迷いが生じて来るわけ  
です。戦後の一時期支配的だった、そして今  
もそういう判断が底流にあるところの、近  
世文学はあくまで封建文学なのであつて、  
その封建的などす黒い商業資本の側に立っ  
て民衆に背を向けたのが西鶴文学だ、とい  
う判断が行なわれていますね。そういう判  
断やその辺の問題についてどう考えるか、  
という方向感覚が、今度の熊谷さんの時期  
区分説に接して自分自身にかなりはつきり  
して来た、ということなんです。

それから、今いったような判断とつなが  
っているような場合もあるし、そうでない  
場合もあるわけですが、西鶴の最初にして  
最高の傑作が『好色一代男』であるとい  
うような評価、あるいは『西鶴置土産』は、  
西鶴晩年の諦観の心境を示す作品だ、とい  
うような評価、そういういわば定説化した  
通説から脱出する強固な足場も、同時にあ

の時期区分説によつて与えられたわけなの  
です。

夏目 私の場合は『万の文反古』や『置  
土産』あたりの晩年の作品から西鶴に接し  
て行（い）ったものですから、『一代男』  
を読んだ時には逆に戸惑いを感じました。  
これが同一作家の作品なのか、という戸惑  
いですね。しかし、これは実は話の順序が  
逆なのでして、熊谷さんによれば、最初の  
うち、視点も焦点もはつきり決まらない格  
好で『一代男』や『二代男』を書いていた  
西鶴が、おいおいに視点の位置づけを明確  
にしてゆき、さらにあとでは『文反古』や  
『世間胸算用』のような、A常の町人V二  
代目の視点に徹した作品を書くようになって  
た、ということ以外ではないのですね。だ  
から、そうした作家主体の変革と確立をモ  
チヴェートしたものは何であつたのか、と  
いう問いがそこに生まれて来ることになる  
のですね。今度の時期区分のお話を通して  
私自身の中にそういう問いが生まれて来た  
ということなのですけど。

荒川 時期区分論が今度の講演のメイ  
ンテーマだ、と理解していいわけですか？

## 西鶴地図

熊谷 そういうふうを受けとめていただけると嬉しいですね。あの講座にはいろんな方がいらして居るわけですが、前々から西鶴文学に関心があるとか、荒川さんみたいに現に西鶴研究に携わっているというような人には、時期区分の問題を正面にすえて個々の西鶴作品の位置づけや評価について一緒に考えあつて貰いたい、と思つたわけです。また、これから西鶴を読んでみようかと思う方たちに向けては、「欺まされたと思つて、いつとき、僕の書く西鶴地図、見取り図に随つて読んでみて貰えませんか——」というアピールでもあつたわけ。

夏目 その見取り図の示しているものがこの作家が自分の意識の内側でつかみ取つた内的必然性、文学的必然性のありようだということですか。

熊谷 たとえ密度は低くともそういうものを記した、大まかな略図でありたい、ということですよ。夏目さんのおつしやる内的な文学的必然性というのは、究極において文学的イデオロギーのことをさしているん

だろうと思うのですが、その文学的イデオロギーのありようを僕も問題にしているわけなんです。新興町人社会の現実と現実の推移を、自分の文学主体の問題として西鶴がどう受けとめているのか、ということですね。その受けとめ方の変容・深化がおのずから（というのは必至的・必然的に）作品の展開にある区切りを与えている。その区切りを文学現象の中に事実に見つけていくのが、時期区分論の課題なわけでしょう。

それから、荒川さんのお話の中にあつた近世文学が封建文学だという規定ですが、それが封建制下の文学以外ではないという意味での封建文学だということなら、それは自明のことだというほかありません。しかし、わざわざそういうことを言い出すのには含みがあるわけなのでしょう。文学といつても、この時期の文学には、前期資本としての商業資本・金貸資本の側に立つ文学と、その対極にある民衆の側の文学とがあるだけだ、ということが言いたいわけなんです。そういうつかみ方がある有効性を持ったつかみ方だということは分か

るんだけど、そういうことだけで割り切つて間違いない結論がえられたと思うのは少し違うんじゃないか、という気がするんです。

## 西鶴世代の典型

夏目 どう違うんですか？

熊谷 『文反古』とか『胸算用』とか、一応の意味での達成点における西鶴文学について考えてみますと、あれは新興町人中層者——A常の町人Vの立場、視点的立場に立つ文学でしょう。中層の町人といつても、上層町人への可能性を持った中層であるよりは、下層者への転落の不安にたえずおびやかされている、西鶴と同世代の二代目新興町人中層者の視点的立場ですね。この時期の西鶴が描いている典型というのは——つまり彼がA普遍の中の個Vとして考へていたそのA普遍Vというのは、自分と同世代の人間（階級的人間）の生活のリアリティーでありメンタリティーだったのですね。『置土産』の月夜・利左（『人』は棒振虫同前に思はれ）の主人公）のように上層町人からの転落者らしい人間が描かれ

ているような場合でも、その個人——個は  
 〆常の町人V二代目という普遍につながる  
 ようなかたちで描かれているわけです。こ  
 ういう二代目〆常の町人Vの文学というの  
 は一体、資本の側の文学の中に位置づくの  
 ですか、それとも対極の立場に在る文学の  
 中に位置づくのですか？

僕はどうも右か左かみたいな分類でいっ  
 さいが片がつく、とは考えないわけです。  
 芥川竜之介や、井伏鱒二、太宰治の文学、  
 つまり僕たちのいう〆教養の中流下層階級  
 者Vの視点的立場に立つ文学がやはりそう  
 であるように、中層新興町人二代目の文学  
 も、そういう規定の仕方ではつかみ切れな  
 いように思うんです。ことのついでに言い  
 ますと、実は僕は、西鶴たちの生きたいわ  
 ゆる元禄期を、幕藩体制Ⅱ近世封建制の、  
 端的な意味においてなのですが、動揺期だ  
 と考えております。動揺期だからこそ、さ  
 つき名前をあげた月夜の利左のような、い  
 つさいの封建的な倫理感覚からはみ出てい  
 るようなメンタリティーの人物が、人間と  
 しての十分の實在感（リアリティー）を持  
 って作品の世界に登場して来て自己主張を

始める、というようなことにもなったわけ  
 でしょう。

荒川 利左のそのはみ出し方ですが、近  
 代の方向へ足が向いている、という意味で  
 はないのでしょうか。

熊谷 違うでしょうね。利左はあそこで  
 以前の豊かな生活への返り咲きのチャンス  
 を目の前にして、しかし自分の“人間”を  
 裏切つて返り咲くことは実は、人間喪失の  
 狂い咲きをすることだとばかり、悩みに悩  
 んだあげく、人びとの前から行方をくらま  
 しますね。「上野の桜返り咲きして……」  
 で始まる作品ですが、返り咲き、すなわち  
 狂い咲きだ、というわけです。つまり、狂  
 い咲きを拒否することで利左は自己の存在  
 証明をおこなっているわけですが、その存  
 在証明の仕方は封建的秩序の中にあつて、  
 そこからはみ出る、ということですよ。は  
 み出したその先に待ち構えているものは、  
 やはり封建の世の中なのです。封建的な  
 論理と倫理、そういう倫理の秩序の支配す  
 る世界なのです。そういうことを知り尽  
 くした上での利左の逃亡ということ。彼の  
 彼の意識と行動は、近代的“なんてもものじ

やありません。さつき申しましたような、  
 端的な封建制動揺期特有のはみ出し方な  
 のでしょうね。

#### 特権町人と新興町人

佐藤 さつきお話に出てきた、新興町人  
 社会の現実ですが、その社会的現実の推移  
 という点について少し具体的にコメントし  
 ていただくといいと思うんですが。

熊谷 あの日配つた〆資料・1Vに引用  
 しておいた、『日本永代蔵』の文章ですけ  
 れども、

——「万の商事がないとて我人年々悔む  
 こと、およそ四十五年なり。世のつまり  
 たるといふうちに丸裸にて取付き、歴々  
 に仕出しける人あまたあり。」「これら  
 は近代の出来商人、三十年このかたの仕  
 出しなり。」

という作中人物の言葉、文中の数字に目を  
 向けて欲しいのですが、『永代蔵』が元禄  
 元年（一六八八）一月、西鶴四十七歳の時  
 の刊行ですから、執筆はその前の年でしよ  
 う。そうしますと、四十五年前というのは  
 ちょうど西鶴の生まれた一六四二年（寛永

十九年)ということになります。それはまた、ちょうど寛永鎖国令発布(一六三九)直後の「万の商事がない」「世のつまりたる」経済不況のどん底の時代です。「永代蔵」の叙述は史実と合致しております。

「丸裸にて取付き、歴々に仕出しける人あまた」というのは、つまり初代・新興町人のことですね。この初代・新興町人の出現は「三十年このかた」つまり今から三十年ぐらいい前のことだというのですから、やはり「永代蔵」の制作年代から逆算して一六五〇年代末(明暦・万治の頃)だということになります。

そうやって特権門閥町人と対立・対決の姿勢で国内市場の開拓をめざしてスタートを切った初代・新興町人が判然と上昇過程をたどり、一応の意味でピークに達するのは、——そのことのメルクマールになるのは、三井高利、伊勢商人の三井高利の江戸進出越後屋呉服店の開業の年(一六七五年)あたりのことと考えていいんじゃないでしょうか。

やがて、この三井高利は越後屋の新商法による莫大な利益・利潤を資本に両替店を

兼業するわけですが、こうした資本の集中化現象が同時に、新興町人社会内部における階級分化を結果するわけだけど、上層町人と中下層町人との階級分化・固定化のシンボリックな現象がこの三井の両替店の開業だ、と僕は思ってみているわけ。「銀が銀を儲くる時節」(『永代蔵』)が、こうして七〇年代末には訪れたわけですね。前期資本の枠のなかの話だけど、当然金貸資本と呼ぶのが適当なんだけど、金経済圏と銀経済圏との為替取引のサヤの問題を含めての金融資本の支配の時期の到来だ、ということも言えそうです。

越後屋開業の年ですが、この年にたまたま西鶴は細君に先立たれて、「名跡(店の経営)ヲ手代ニユヅリ」(『見聞談叢』)雑階級者としての専業作家の途を歩き始めることになるわけです。それから八年後の一六八二年に浮世草子の第一作『一代男』が発表されるわけですが、A常の町人V、新興町人中層者二代目という自分本来の歴史的・階級的な文学的イデオロギーにおいて現実を見、人間を見るという構えはまだ見られないのです。僕というA第一期Vで

す。リアリズム以前ですね。

### 長編と短編

夏目 一六八〇年代から九〇年代へかけての新興町人社会の現実、新興町人の実人生を、自分自身がその一人であるA常の町人V二代目の立場でどう見ているのか、あるいはどの時期どの時点において自分本来の立場を文学的イデオロギーにおいて自覚しえたのか、というアプローチにおいて熊谷さんの時期区分説の方法原理になつているのだと思いますが、この区分説は熊谷さんの長年の持論だったわけですか？

熊谷 どういたしまして、そこへ判断が落ち着いたのは先月か先々月のことなんです。婦民さんの依頼を受けて、うかつに引き受けてしまつてから、期日が近づくにつれて悩みましてね。講演というのは、仮説だろうが何だろうが体系がないと喋りようがないんです。その体系というのがこの場合、時期区分論なのです。長いこと苦しみました。この苦しみ、主催者にも聴衆の方たちにも分かつて貰えない苦しきみでしょうね。

荒川 お察しますすよ（笑い）……。みんな避けて通つて問題ですからね。

佐藤 この辺で当日示された時期区分についてなぞり返ししながら、付け加えることがありましたら言葉を添える、というふうにしてお話してくださいませんか。第一期が長編制作の時期ですか。第二期が短編から中編へ、また中編から短編へという揺れのみられる時期ということでしたか。次第に短編作家への途を歩み始めるわけですね。それから、第三期。短編への徹底の時期ということですね。

熊谷 長編制作の時期というより、むしろ長編を志向しつつ、長編を書くことには失敗した時期、長編への志向と挫折の時期がその第一期だ、ということでしょうか。晩年のゴリキイが、後輩の若い作家たちに向かつて言ってるんですね。「きみたちは、きみたちの仕事を長編から始めるという愚をおかしてはならない。まず、短編を書く仕事でみっちり苦勞して、その中で、言葉を節約することを学び取り、描こうとする対象の的確で精緻なつかみ方を身につけることが必要だ。」という意味のことを

懇切に語って聞かせていますが、わが西鶴は、馴れない散文学の仕事を『一代男』や何や長編から始めてしまったわけですね。以前に、浄りの仕事でも失敗してるんだが、この人、全然懲りないんですね（笑い）……。でも、言葉を節約する訓練は俳諧の仕事を通して身につけたものになつていくわけだけど、『一代男』を書いたあとも、一日に二万三千五百句の独吟をやってみせるというようなのは、言葉の節約という点からいうと、どういうことになるんでしょうか……。何か娑婆気が多すぎるというのか……。

夏目 そうすると、『一代男』や『二代男』などは失敗作だ、というふうにお考えなのですね。

熊谷 部分部分の描写の確かさとか、ある点に見られる長編構成への発想とか、そういう点はずしてトータルとしていえば熟していない、というほかなさそうですね。その点、どなたもお読みの阿部次郎氏の否定的な評価（「好色一代男おぼえがき」）に、どちらかというとは僕は近いんです。阿部さんの『一代男』評価は、今日の西鶴論

にとつて古典的な見解だと人はよく言いますが、問題の限り、あれはすぐれた意味で古典的な見解なのであつて、筋が通つている、と僕は思つてみております。

作品全体についていうと、そういうことなのですが、ディテールについていうと、話が少し変わつて来ます。すぐれた意味での長編への志向は、やはり『一代男』にあつたんだ、ということをおぼわされます。この『一代男』の中で、ロウガイか何かを患つて寝たつ切りの夫と、餓死寸前というところまで来てるみたいな乳のみ児や幼児を抱えて、窮乏のどん底にあつて、もう涙も枯れ果てたという感じの細君というか若い母親が描かれている個所があります。その彼女が「死なれぬ命のつれなくて……」と夕闇の中に街娼となつて姿を消し去るのを目にして、さすが遊蕩児の世之介も暗たんたる思ひになつて立ちすくむ、というくだりがありますでしょう。

話がそこへ行くまでに、そこ、ここでさまざまな遊女を相手に遊び呆けている世之介の姿が、場面を継いで次から次と書かれておりますでしょう。まるで、これでもか

これでもかという調子で……。そういう描写のあとに、「死なれぬ命のつれなくて」が位置づけられているからこそ、そのところで読者は、世之介ともども、頭を抱え込むことになるわけなのです。

また、これは『二代男』であつたでしょうが、遊里の華やかさとか大夫の位にある遊女の優雅さなどを、いやというほど書き続けて来た、そのずつとずつと後のところで、優雅に華やいだその遊里のトップ・レディーが、トップ・レディーの地位と体面を保つていく上に否応なしに支出しなければならぬ必要経費（笑い）……茶屋への付け届けや太鼓持ちへのチップその他その他ですが、それを克明に書き記した彼女の小づかい帖を誰やらがのぞき見る場面があります。つまり、読者はそれを一緒にのぞき見させられるわけですが、「なるほどこれでは彼女たちは遊里から一生足抜きで生きるはずはないな」と思い、それ恐しい遊里の仕組み、カラクリに思いを至させられるわけです。

こういう性急さを避けた、結論を急がない、息の長い、それだけにしんそこから読

者の納得を勝ち取るような描写というものは、やはり『一代男』の場合同様、長編構成でないといえないものなのでしょう。長編への志向と部分的な達成はやはりそこに見られる、と言つていいのでしょうか。

### 新しいタイプの特権階級

夏目 どうやら第一期の西鶴もまんざら捨てたものじゃない、というみたいにな話になつて来ましたが（笑い）……。

熊合 ええ、なかなかどうして捨てたものじゃありません。評価すべきところはやはり評価しなくちゃ、と思います。ただ、ね、やはり熟していない。長編としてみて熟していない、というだけじゃなくて、文学そのものとしてみて熟していない。自分たちの階級、自分たちの世代の文学になり切っていないのですよ。

この時期の西鶴には、自己本来の階級的な立場である新興町人中層者二代目―西鶴自身の語彙でいえば〆常の町人Ⅴ二代目です。この〆常の町人Ⅴ二代目に固有の視点的立場というものが自覚されていないわけでしょう。世代意識も非常に弱い。つ

まり、この時期の西鶴にあつては、バクゼンとした意味での二代目新興町人の立場という、立場にも何にもならないような立場から、初代の新興町人への、それも特権町人を打倒してそれと入れ替わつて経済界に君臨した、エリート初代新興町人への敬意と礼賛がその意識の半ばを占めていた、という格好でしょう。つまり、バクゼンと二代目新興町人として自分を位置づけて考える限り、自分たち二代目にとつての理想像は、初代新興町人の中の“成功者”であるほかなかつたわけなのでしょう。

そういう新興町人の範型・理想像の賛美につながるかたちで『一代男』の世界が造型されております。『一代男』の主人公世之介は（どうも長編の主人公としての一貫した性格を与えられていませんが）、ともかく一応二代目としての位置づけに在るわけですが、だが、どうも新興町人二代目に固有のものを欠いた存在です。そのメンタリティーも何もかも。これだつたら特権町人の息子だ孫だといつてもいい。武士でも百姓でもないから町人だ、というみたいになへんバクゼンとしたものですね。

そこで、少しこじつけていえば、この作品を書いている八〇年代の時点ですが、特権門閥町人を市場から半ば締め出すかたちでのし上って来た新興町人上層者の多くはこの時期においてはすでに、別個の新しいタイプの特権階級者として、新興町人下層者大衆や一部農民大衆の前にその権力者としての姿を見せて来ていたわけなんですね。たとえば、上層新興町人の御用商人化です。旧特権町人ともども、あるいは旧特権町人と入れ替わって、幕府や諸藩の御用商人になった者も少なくないのですね。そういう現実がそこにあるとしますと、上層新興町人の二代目を描くことと、特権町人の倅（せがれ）を描くこととのあいだに、焦点的には差がなくなるというのは当然なのかもしれませんね。

### 人間の可能性を探る

荒川 八常の町人V二代目の視点への移行が見られるのが『永代蔵』や『五人女』の段階ですね。

熊谷 たとえば、『五人女』の清十郎やお夏（『姿姫路清十郎物語』）という二代

目のつかみ方ですが、とくに清十郎の場合ですけれども、初代である父親との対比の上に正も負も含めて二代目に特徴的な個性が追求されている、と言っているんじゃないでしょうか。もはや、初代礼賛という姿勢は見られませんね。財産を守り家の体面を守るためには、勘当という手段に訴えて息子を追い出すという親仁の姿を、西鶴はここでは一幅のカリカチュアとして描いておられます。『永代蔵』でも、その中のいろんな短編で、初代の親仁さんたちは、ものごとと徹底しているのはいかか徹底の方向と徹底の仕方が間違っているとか滑稽だ、といって、やはり戯画化していますね。そのことで、自分たちを人間として面白味のない人間Vにしてしまっていることを、ユーモアとジョークを交えて語っているわけです。また、そういう初代との対比の中で、二代目のひ弱さと不徹底さをえぐり出してみせています。まるで△弱いということは罪悪であるVというみたいな調子で……。

夏目 自分の世代、二代目に対してはきびしい、ということですか。

熊谷 ええ、そうなんです。初代のエゴイズムを生半可に受け継いだ、こずるさんかに対しては、すぐきびしいですね。と同時に、初代には見られない、二代目の持つすばらしい、人間的な可能性を、この時期の西鶴は次つぎと描いていますね。

佐藤 たとえば？

熊谷 『五人女』のお夏なんかもそうですね。あれは初め、仕様がないう娘だったでしょう。好色だからいけない、というんじゃない、どこからみてもダメ女だったでしょう。好色是非の問題は最高裁にお任せするとして（笑い）……可能性ゼロに見える彼女が、清十郎の死後、ちよつと誰にもまねのできないような生き方を採り求めて徹底した生き方で生涯を過ごすでしょう。人間性に徹した愛情というものは、こんなにも美しく強いものなのか、ということを読者に実感させる、そういう描写になつてますでしょう。……ここで第三期へ話題を進めなくてはならないけど、これは今回の講座の際に、ということ。